

も一度ウィーン 記

(2013年6月11日発6月16日帰国)

相変わらずの備忘録ですが、今回は初めてのヘルシンキ経由。

6月11日(火)

ウィーンへ向けて出発。水戸駅南口で0649発ローズライナーに乗り込む。ほぼ満席だった。同行する上司のHさんはぎりぎりで乗りこんで来た。今回はフィンランド航空(FINNAIR、フィンエア)でヘルシンキ経由でウィーンへ入る。直行便やその他の経由地経由より安いらしい。成田では第2ターミナルで、JALと同じくONE WORLD連合だ。

チェックイン。席が離れ離れになっている夫婦がいるので代わってくれないかとの申し出を受ける。

No problem で一番前の席になった。

AIU 海外旅行保険を買い、NAA グリーンポート・エージェンシーとやらの会社でユーロを2万円分ほど買う。1€は132.85円で19,927円也。保険は8,640円。こう毎回保険を買わなくてはいけないものか？

ターミナルの2Fへ上がってショップを見回るも特段興味はなく、荷物検査を意外とスナリ過ぎ、出国審査もあつと言う間に過ぎ、シャトルに乗ってサテライトへ向かう。JAL ラウンジのSakura Loungeはファーストクラス用で、僕らは2Fへ。それでも



奥へ奥へと広い。寿司をつまみ、コーヒーを飲む。

搭乗ゲートへ向かう途中にHさんに渡しておいた方がいい仕事の資料を思い出し、同僚のO

さんへ携帯電話して電子メールの添付ファイルで送信してもらう。何とも行き当たりばったりだ。

搭乗ゲート94番前には、偏見だろうが、いかに

	エンジン	通路数		座席数
A300	2基	2列		250-361
A310	2基	2列	A300型機を6.96m短胴化	200-280
A318	2基	1列	A320型機を6.17m短胴化	107
A319	2基	1列	A320型機を3.77m短胴化	124
A320	2基	1列		150
A321	2基	1列	A320型機を6.94m延長	185
A330	2基	2列		253-295
A340	4基	2列		261-380
A350	2基	2列		250-300
A380	4基	2列	総2階建、1,2階とも2列	555-853

も北欧人と言う風貌の人が多。1100発フィンエアAY074便ヘルシンキ行き。機体はエアバスA330。最初のエアバスは座席数が300だったことからA300と命名されたらしい。その後は座席数に関係なく310, 320, 330, 340, 350, 380と番号付けされた。左下の表(Wikipediaより引用改編)にあるように、A380はでかい。まだ乗ったことはない。

僕の席は真ん中の列で、右隣は団体旅行に独りで参加していると思われる高齢の男性だった。オーバーヘッドに荷物を入れようと持ち上げる姿がなんとも危なっかしい。これでフィンランド内を回るのだろうか。添乗員は気が気でないだろう。そうかと思うと通路を挟んで反対側の女性ふたりは、同じ団体だろうが、元気だ。つまりうるさい。

食事は満足。コーヒーサービスがオーストリアン航空みたいに凝ってはいないが、これも満足。食事とともに出された塩・胡椒セットがかわいくてひとつ持ち帰る(写真→はホテルで撮ったもの)。



今回は珍しく映画を1本も観ず、ひたすら岩波のトーマス・マンの『ブッデンブロークの人びと』(Die Buddenbrooks, 1901)(下)を読む。北杜生の『楡家の人びと』のモデルとなった小説だ。クライマックスに近い。コンズル夫人が亡くなり、息子のトーマス・ブッデンブロークが事故死。その息子のハンノはどうやらチフスで死に、夫と一人息子を亡くしたゲルダは実家に帰るらしい。ひとりトーマスの妹のアントーニエが残される。波乱の人生を生きたトニーがひとり残されるところで物語は終わる。こうして17世紀に北ドイツで一世を風靡したブッデンブローク商会は没落した。日本語訳には「ある家族の没落」と副題がついている。

舞台のリューベック(Lübeck)はバルト海に面するドイツの都市。寒そうだ。小説に出て来たトラヴェミュンデ(Travemünde)という地名も実在することをGoogle Mapで確認した。

ウィーン記のはずがどんどん脱線し、例によってWikipediaの記事を利用してリューベックを紹介しします。

リューベックはドイツ連邦共和国の都市でシュレースヴィヒ=ホルシュタイン州に属する。バルト海に面する北ドイツの代表都市であり、かつてはハンザ同盟の盟主として繁栄を誇った。

正式名称をハンザ都市リューベック (Die Hansestadt Lübeck) という。バルト海南西部のリューベック湾に面する海港を有する港湾都市である。造船産業などでも繁栄した。約 55 キロ南西にハンブルク、60 キロ北西にキール、55 キロ南西にシュヴェリン、100 キロ東にロストックが位置する。北緯 53 度。ちなみに日本最北端の稚内は 45 度。

文化:トラベ川とトラベ運河に囲まれた島にある旧市街地は世界遺産に登録されている。船での周遊が観光の目玉。古い船員組合の建物がレストランになっていて、大航海時代の巨大な帆船模型が天井から吊り下げられ、また壁面はさまざまな航海の様子を描いた油彩で飾られた中での魚料理はまた格別と評判。トーマス・マンの故郷で、『ブッデンブローク家の人々』はこの町に住んだ彼の一族をそのままモデルにしたもの。生家は以前は銀行の支店だったこともあるが、現在ではマンの記念館になっている。

トラヴェミュンデ:町の中心部から 20 キロほど離れたところのバルト海に面した海水浴場。ドイツ有数のリゾート地として有名で、夏場は多くの海水浴客で賑わう。

トーマス・マン一家は没落はしなかったのだろうが、彼の妹二人と長男が自殺をしているところを見ると平々凡々たる一家ではなかったのだろう。それにしても『ブッデンブローク』はトーマス・マン 25 歳の作品だ。それから昔々読んだ『魔の山』は、彼の妻の肺病の療養地であったダヴォスを舞台にした作品とか。

AY074 便は 9 時間半の飛行で 15 時過ぎにヘルシンキ・ヴァンター (Helsinki-Vantaa) 空港到着。雲は多いが天気は良好。シェンゲン協定によりここで入国審査を受け、乗り継ぎのための荷物検査を受ける。30 番ゲートでウィーン行きの乗り継ぎ便を待っていると、H さんの仕事仲間のフィンランド人女性が

H さんに気付いて合流してきた。

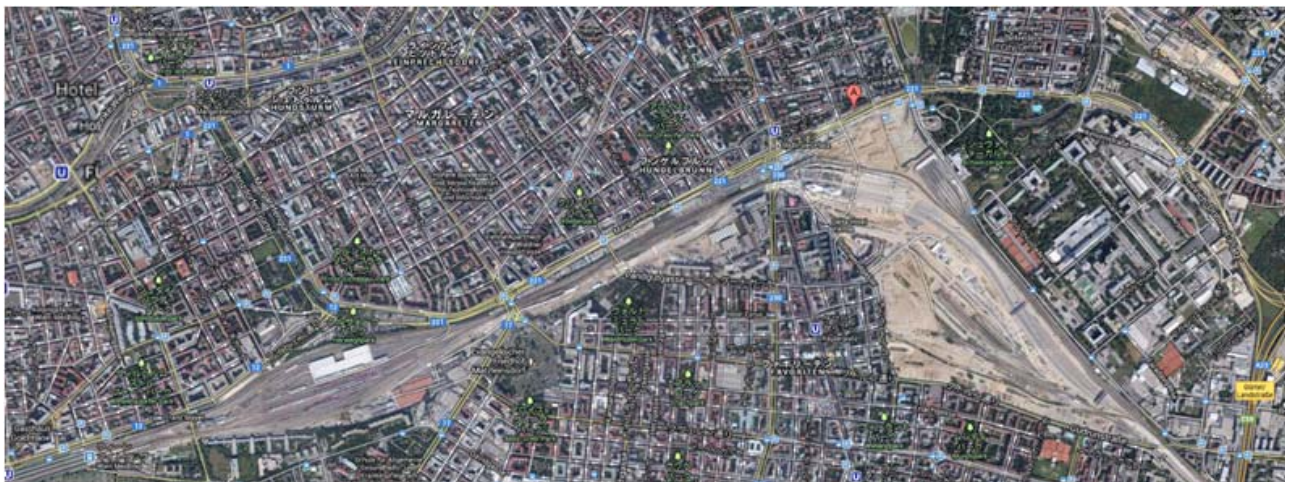
彼らにとってウィーンへの出張は日本で言えば北海道から東京へ出て来るようなもので、今回の会議の最終日が午前で終わるのも、その日のうちに帰宅できるようにだ。ヨーロッパの関係者はそうやってしょっちゅう顔を合わせて議論する。交渉が上手になるはずだ。

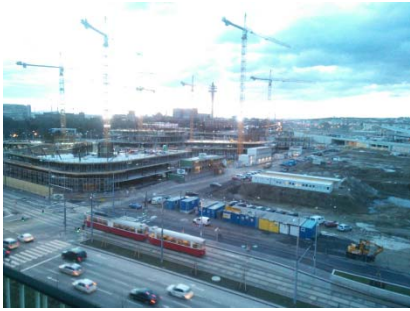
ウィーン行きフィンエア AY767 便は定刻 17 時に出発。型式は機内雑誌によればエンブラエル (Embraer) 機か。Wikipedia では退役機材リストに入っているが。

機内で夕食。すでに今日の食事のリズムは崩れている。定刻 18 時半にウィーン・シュベヒャート (Wien-Schwechat) 空港に到着。時差が 1 時間あるので、飛行時間は 2 時間半になる。荷物をとるところまでえらく長いこと歩き、荷物が出て来るまで結構長く待たされ、ウィーン事務所長直々に運転する迎えの車に乗り込む。

いつものホテル・プリンツオイゲンに到着。4 度目か。ホテルの前の一帯は、鉄道の南駅を中心にした一大再開発が進んでいる。タワークレーンが何本も建っている。Google Map で見るとわかるのだが(下の写真:右上の小さな赤い A のマークのところホテル)、確かに大規模工事だ。

「かつてウィーンからはハプスブルク帝国の各方面にむけて個別に鉄道が敷かれたため、パリやロンドンなどに見られるようにターミナル駅が分散しているが、これは現代の国際的な旅客移動を考えると合理的ではない。例えばドイツ方面から東欧方面に乗り継ぐためには、西駅から南駅に路面電車で移動しなければならない。南駅も構内で東駅と南駅に分かれており、イタリア方面から東欧方面には直通できない構造になっていた。このため、全ての国際列車が発着するウィーン中央駅 (Wien Hauptbahnhof) が建設されることになった。新駅は、地下鉄 U1 のスートティローラープラッツ (Südtirolerplatz) 駅と結

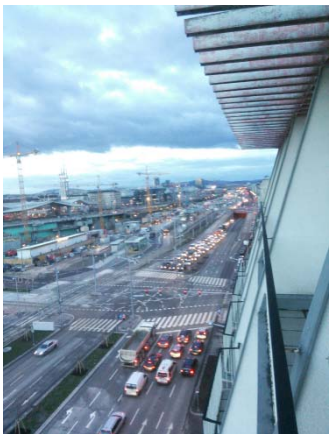




ばれる。2012 年末に暫定開業、2015 年に全面完成を予定している。周辺は再開発されオフィスビルや住宅、緑地、学校、商店などを含む複合施設街区ができる。駅と直結した 2 万 m² の商業施設も予定されている。」「現在は、ハンガリー、スロバキア、チェコ方面など旧南



南駅のうち東駅の機能のみを受け継いでいる。2015 年には全面開業し、西方面を含む全ての国際列車、優等列車がこの駅に停車することになる。それまでは旧南駅の機能はマイドリンク駅が担うことになる。」(Wikipedia より引用 & 改編) マイドリンク駅は前ページ下の写真の左下端辺りだ。



工事中の敷地内には 10 階建てぐらいのビルがいくつも建ち始めている。周辺車道も広げ自転車用レーンも出来、信号は増えたよう。次に来る時にはホテル料金も上がっているかも知れない。

上の 3 枚の写真は前回南側の部屋へ泊まったときの風景。上から、窓からの工事の様子、ホテルの前の地上からの様子、ホテルの下を通るギェルテル通り。



そうだ、ともかくチェックイン。人気(ひとけ)のないという今までのイメージと違って初めてのことが、ホテルのロビーで団体客がチェックインを待っていた。韓国からのようだ。

今回の部屋は 8F812 室(←)。窓は北向き、つまり街中に向

いていて開発中の南駅を上から眺めることはできない。その代り近くの聖エリザベート教会と、遠くにステファニー教会が見える(翌日の 3 枚組写真)。



右上の写真は北西の方向を撮ったもの。10 年以上前このホテルで屋根が連なるこの景観を初めて見たとき、映画『第三の男』でオーソン・ウェルズが屋根伝いに逃げたシーンを思い出した。何故だかわからないけれど、そのことがこのホテルを常宿にしている理由のような気がする。『第三の男』のラストシーンのロケ地だった中央墓地までも行った。

機内で満腹になっている到着当日はこうして夜を迎える。

できればしたくはないのだが、いつものようにネットワークにアクセスし、メールチェックを済ます。チェックだけでは済まないから結構時間を食う。今回はホテルチェックインからチェックアウトまで 3 日と十数時間だから、4 日分 12€×4 日 = 48€を swiss.com から購入。

最近シャワーしかない部屋にも大分慣れて来た。そう言えば、今夕部屋に入り荷物を開いて一息ついた頃、外で子どものはしゃぐ声が聞こえていた。ウィーンで初めて聞くなと思いつながら床に就く。

6月12日(水) 晴れ

今日から出勤。まず朝ご飯。はじめてこのホテルに来た時からメニューは何ら変わっていないような気がする。日本で言ういわゆるバイキング形式、パフェスタイルで、日本のホテルの朝食バイキングの洋食部分を豪華にした感じだが、ドイツらしいと言うか、パンとハムとチーズとヨーグルトは種類が豊富でたっぷり。コーヒー、ミルクなどはポットを自分のテーブルに持って行ってガバガバ飲む。魚が 1 種類、一切れ食べてみたが何だかよくわからないし、焼いてあるのに冷たくなったのを食べる習慣がない。

野菜だけが気に食わない。野菜は大振りのきゅうりと大振りの黄色いパプリカと大振りの赤いパプリカをそれぞれ大きめ



にスライスしたものがまとめてひとつの皿に山盛りになっている。この3種類しかない。

パンはいろいろ種類がある。と言っても、いつの間にか僕のメニューは大体決まって来て前ページの右下写真のようなものになる。満腹。

まあこの朝食は気に入っている。それに、僕の朝食時間が開店直後の6時半過ぎと早いからなのか、今まで混んだ試しがない。閑散とした中で静かに食べることが出来る。合席などしたことがない。そうそうホールが広いのも気に入っている。

今回スポーツ選手らしい体格のいい、ただでさえゲルマン民族は体格がいいのだが、その中でも目立ちそうな若い男性がひとり、赤いパプリカがことさら好きなのか、一人で大方取ってしまう。もともと3色しかないので残りは黄色と緑だ。僕はかろうじて残っていた赤のパプリカに数切れありつく。

8時頃ホテルを出、いつもの地下鉄U1線のスタートローラープラッツ駅へ。今回は3日間しか通勤しないので、72時間のチケットを購入する。

昼御飯は職場の大きくて混雑する食堂で、例によって栄養価たっぷりだ。

晩御飯は同行した上司に連れられて、地下鉄シュヴェーデンプラッツ (Schwedenplatz) 駅から歩いて5分のピザ屋さんへ行く。彼の行きつけの店らしく店員と顔なじみのようだ。

Ristorante Rossini

Schönlaterngasse 11, 1010 Wien, Österreich

取り敢えずのビールと大きなピザ。僕はアンチョビを選ぶ。食後酒はグラッパ。さすがに強い。一杯を超すと多分歩いて帰れないな。チップを含めて付帯で合計40€弱を払った。この辺りでは高いらしい。

以前酔って地下鉄に乗ったとき、寝過ぎて終点の駅 (Reumannplatz 駅) まで行ってしまった。さすがに気味が悪かった。運よくまだ折り返しの電車があったからよかった。今日は寝過ぎさず無事下車した。

(Wikipediaより引用&改編) **grappa** : イタリア特産の蒸留酒で、ブランデーの一種。ワインを蒸留して作る一般的なブランデーとは違い、ブドウの搾りかすを発酵させたアルコールを蒸留して作る。多くは樽熟成を行わないので無色透明だが、ブドウの香りを程よく残す。アルコール度数は30から60度。香り付けしたものもある。

イタリアではポピュラーな酒で、食後酒としてよく飲まれる。バールにも置かれている。度数が高いためリキュールを作成する際にも使用される。またイタリア中部では、エスプレッソコーヒーに3~4杯の砂糖を入れてかき混ぜずに飲み、カップの底に砂糖が溜まっているのでそこにグラッパを注ぎ、飲むという変わった方法がある。

EUの法律で、グラッパと呼べるものはイタリアで作られたものと決められている。ブドウの

搾り粕をもとに製造するため「かすとりブランデー」といい、フランスのマー

ル

(Eau-de-vie

de marc) などもこれに含まれるが、

長期の樽熟成を経てから

製品化される点がグラ

ッパとは異なる。た

だし、グラ

ッパでも樽熟成をした

ものもある。グラ

ッパは

イタリア全

土で作られるが、有名

な町としてはヴェネツ

ィアの北西にあるバツサー

ノ・デル・グラッパがあり、

グラッパによる町興しが盛

んである。この

町にはポーリ (Poli) 社による

グラッパ博物館がある。

グラッパという名前の由来

には二つの説があり、一つ

は北イタリアでブドウの房

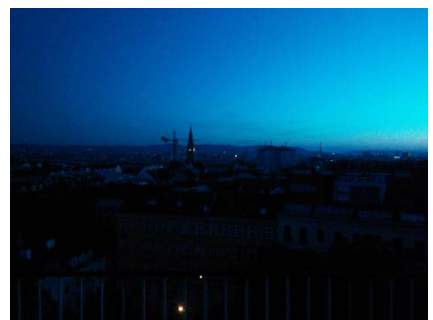
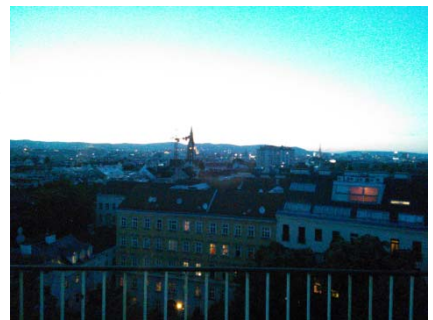
を意味する

grappolo という説、もう一つ

はバツサーノ・デル・グラッ

パ (グラッパの山の下) という

町の名前からくるという説



ィアの北西にあるバツサーノ・デル・グラッパがあり、グラッパによる町興しが盛んである。この町にはポーリ (Poli) 社によるグラッパ博物館がある。

グラッパという名前の由来には二つの説があり、一つは北イタリアでブドウの房を意味する **grappolo** という説、もう一つはバツサーノ・デル・グラッパ (グラッパの山の下) という町の名前からくるという説がある。

日本での認知度は一般的なブランデーやウイスキーに比べるとはるかに低いですが、20世紀末のイタリア料理ブームが来ると、イタリア料理店の増加と共に百貨店の洋酒売り場や比較的大型の酒類販売店などにも置かれるようになった。しかし、日本で展開するコーヒー・チェーンやイタリア風のバールとして営業する店でも酒類の提供は行わない (セガフレード・ザネッティでは提供されない) ことが多く、グラッパを外食時に飲むのは難しい。近年、日本各地に多くの店舗を構えるイタリアンレストランチェーン・サイゼリヤのメニューにグラッパが加わった。そのため、以前と比べて比較的容易にまた安価で飲めるようになった。

6月13日(木)

昨日の繰り返しのよう今日が始まる。

昼御飯も繰り返して、職場の大きくて混雑する食堂で例によって栄養価たっぷりだ。晩御飯は食欲なく、抜きで済ます。

早くにホテルに帰着した。前ページ右の3枚連続の写真は時間を変えてスマホで撮ったもの。確かそれぞれ17時頃、19時頃、21時頃。21時頃でもまだ明るいと思って撮ったのが3枚目だが、実際は写真よりはまだ明るい。スマホのカメラでどうやって調光していかかわからなかったのだ。とにかくこの時期－ウィーンでももっともいい季節だと言われているようなこの時期－、夜9時でまだ明るい。

6月14日(金)

仕事最終日で午後早めに解散した。

地下鉄シュテファンシュプラッツ (Stephansplatz) 駅で降りて歩いて南へ下る。ケルントナー通りという、狭いけれど観光客用のもっとも賑やかな通りを歩く。実は一つ手前のシュヴェーデンプラッツ駅で降りて歩こうかと思い一旦地下鉄を降り地上へ上がったのだが、どちらへ向いて歩きだしたらいいのかわからなかった。もう一度地下鉄に乗り一駅先のシュテファンシュプラッツ駅で降りた。ここからならわかる。

今日は土産を買った。何をかうかすでに決めていた。前回も買った庶民のチョコレート Milka。もちろんケルントナー通りのような観光客用の土産物店には売っていないだろう。コンビニに平積みになって売っている。

オペラ座の脇を抜けてリングを超え、カールスプラッツ (Karlsplatz) を過ぎるとケルントナー通りはファヴォリテン通りと名を変える。この通りはウィーン工科大学を過ぎてまもなく左に少し曲がりまた南下して線路にぶつかる。絵葉書が豊富な文房具がこの通りにある。

暑い。汗が流れる。仕事帰りだからジャケットを着ているが、街ゆく人は皆半袖だ。

途中で BILLA とかというコンビニへ入る。ここにも Milka は売っている。板チョコ1枚ディスカウントセール中で 0.79€, 2枚ずつ9種類他買って合計 9.59€(1,274 円)。書類が詰まったバッグに詰め込む。心配はこの暑さ。ホテルまでは結構ある。溶けそう、溶けそう。

途中で一本東側のアルゲンティーニャー通りを南下する。何とも面白くない通りだ。少しずつ上り坂だろうか。汗が噴き出す。チョコレート溶けそう。この通りは一旦エリザベート教会にぶつかる。信号で待っていたら女の子がふたり自動一輪車みたいなのに乗って横切って行った。

教会周囲を迂回し、アルゲンティーニャー通りを

さらに南下する。ゴールデンガッセ (小路) との角のコンビニ・SPAR を過ぎ、ワリンガーガッセとの角にちょっと気になるパン屋さん・カフェを見、あと少しでホテルがあるギュルテル通りへ。

部屋へ到着してすぐにチョコレートを冷蔵庫へ入れる。そして冷蔵庫を開けたついでにビールを1本。

小1時間過ぎて出掛ける。今夜は18時からホイリゲ (「ワイン酒場」) で知り合い同士で懇談会。在ウィーン職員や OB など集まる。シュテファンシュプラッツ駅の地下鉄 U4 線のプラットホームで待ち合わせだ。U4 線はカールスプラッツも通っているからそこで乗ればいい。ホテルからカールスプラッツまで歩こう。ベルベレーデ宮殿の西側の電車を北上する。

ソ連兵の慰霊碑を右手に見る頃になると、左手に高級そうな SPAR や、以前「ビッグマックひとつ」と注文したはずなのに3個も出て来たマクドナルド。ウィーンには SPAR が多いと思うが、アムステルダム発祥の世界最大の小売店チェーンらしい。

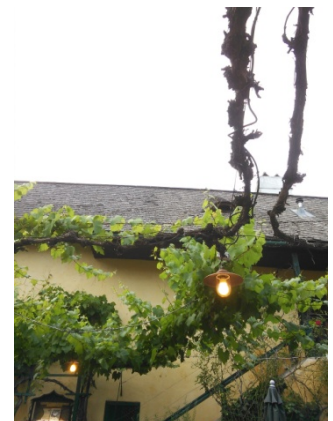
前回のウィーン記

(<http://www.5f.globe.ne.jp/~pina/wa92/bunsho/2009Vienna.pdf>)

にも書いたのだが、このソ連兵の慰霊碑がここに存続していること自体が不思議だ。ウィーンは、ナチスが崩壊して第二次世界大戦終了後 1955 年まで、米英仏ソの 4 カ国による共同占領下に置かれ、その後米英仏は撤退。ソ連だけは残ったらしい。映画『第三の男』はこの占領時代を映した映画だ。

元の話に戻る。そうそうホイリゲに行く途中だった。

カールスプラッツで地下に潜り、結構歩いて地下鉄 U4 線へ。地下鉄はリングに沿って反時計回りにぐるっと回っ





てシュヴェーデンプラッツ駅へ到着する。何のことはない、ソ連兵の慰霊碑のところを通過して来たなら、左へ曲がったカールスプラッツ駅ではなく、右へ曲がったシュタットパーク駅でもよかった。

駅のプラットホームで皆と待ち合わせ、地下鉄U4線の終着駅ハイリゲンシュタットで降り、そこでバス 38A に乗り換えて間もなくだ。店は、「Mayer am pfarrplatz」という。僕は確か3度目だ。ホリイ

ゲと呼ばれるのは「ワインの作り酒屋が自家製ワインを売る」というのが建前であるところ、最近はそのでもないホリイゲもあるらしいが、ここはれっきとしたホリイゲらしい。それでほぼワインしか飲めない。まあ、僕にとってはアルコールの種類はあまり重要ではない。飲まれる液体には申し訳ないが、僕にはアルコールという物質を飲んでいることにしかならないので。

夕方6時半。空を見上げるとまだまだ明るい。中庭に席をとる。前ページとこのページの写真でわかるように、この時期しか味わえない何とも言えない雰囲気です。

6月15日(土)

最終日の朝。近所の SPAR で土産のチョコレートを買って足す。休みの日の朝から Milka のチョコレートばかり買って行く客であった。5.15€。

ウィーン事務所長が9時にホテルへ迎えに来てくれて空港へ。ウィーン空港の古い方のビルだ。

チェックイン後搭乗時刻までえらく時間があるので歩き回ったが、新しいビルが出来てテナントが皆移ってしまったからか、廊下も広々としてはいるが、閑散として何とも寂しいものだ。もっともここ

で土産に酒など購入してもヘルシンキで没収される。土産物を買う気も起らない。ラウンジでひとしきり同行の上司と雑談をし搭乗。1115 ウィーン発フィンエア AY2766 便、1440 ヘルシンキ着。

さて、このヘルシンキだが、どうやら今はヨーロッパへ行くには、直行便でない限り、ヘルシンキを経由するのが流行りらしい。JAL は大いに宣伝している。日本からの直行便が飛んでいるヨーロッパのハブ空港で一番近いのがヘルシンキとのこと。日本よりもずっと北に位置する分、北極上空からアクセスする航路にとってドイツやフランスよりも近い。成田からの所要時間は10時間5分で、パリの12時間15分、ロンドンの12時間10分、フランクフルトの11時間45分より短い。パリ行きと2時間も差があるのは驚きだが、つまりヨーロッパも広いということだね。ヘルシンキから欧州各都市へのトランジットも充実している。観光国フィンランドにとっては日本からの旅行者を大いに呼び込むことができる。行きの便で乗っていたような団体客が今後も増えるだろう。

行きと違って、それに3時間前に発ったウィーン空港の古い方のロビーと違って、帰りのヘルシンキ空港は真新しいビルで明るい。土産物店やこじかれたカフェが並び、大勢のトランジット客が行き交う。その大部分がアジア人で、その大部分がおそらく日本人だ。

今まで買った土産と言えばチョコレートばかりなので、この辺りで少し物色しよう。

そうか、フィンランドはムーミンの国だった。そんな店に入って漁っているのは日本人ばかりらしく、きっとこちらの人も日本人のムーミン好きを知っているのだろう。

「MoominShop」とかで絵葉書ばかり14枚、21.00€を買う。行った先で絵葉書を買うのはまあ僕の病気だね。コレクションしているわけではなくて実際に友人宛に使う。ちなみに、買った絵葉書(下の写真)のうち、スナフキンの絵葉書は小さいけれど日本国内では定型外扱いになって120円必要だ。50円では不足ですので注意して下さい。

それからおふぎで馴鹿(トナカイ)肉の缶詰を1個調達。7.95€、800円か。電子メールで tonakai... というニックネームを使っている同僚宛だ。共食いだね。トナカイ肉と云っても、どうやらペースト



状で、缶の中国語らしい説明を見るとトナカイ肉が70%に「猪肉」が30%混ぜられている。中国語では「猪肉」は豚肉のことでしたかね。

北欧ではトナカイは重要な食用肉だから、その缶詰も珍しくはないのだろうが、他に熊の絵を書いた缶詰もあった。これも日常食か？ともあれ買った缶詰は僕は試していない。

入国審査を済ませ、搭乗ゲート32Aの場所を確認する。時計を見ると搭乗時刻までまだまだ時間がある。ゲートの先の広々としたラウンジへ陣取る。広々としていたが、コーヒーを飲みながら持参してきた本などを…読めたのは最初の10分程度で、どうしたことか急に客が増えてきた。もう少し静かにしゃべれないものかとぶつぶつ言いながらラウンジを後にする。それでもまだ時間がある。この頃、やけに時間があるなと思っただが、気にしなかった。それで後で慌てることになる。

ラウンジを出ても他にいくところはないので、搭乗ゲートの前の座席に座る。搭乗ゲートは前の便の客であふれていたが、しばらく経って彼らはゲート奥へと消える。そして誰もいなくなる。ここに至ってはいよいよ何かおかしいと思いはじめた。次のわれわれの便までそれほど時間があるわけではないので、次の便の乗客がゲート前に残っていてもいいはずなのに誰も居なくなってしまったのだ。

「おかしい」と思ったら放送がかかった。なんと名前を呼ばれている。「32Aゲートへ来い」と。32Aゲート…。そしてやっと気付いた。僕が居たのは32ゲートだったのだ。最初に場所を確認したつもりゲートは確か32Aだったと思うが、いつも間にか頭の中からAの文字が脱落してしまっていた。

慌てて隣の32Aゲートへ。少し小柄な中年の男性係員に名前を告げると、にこやかにこの先へどうぞと手で示してくれた。

焦って機内へ入り、すでに他の乗客は皆くつろいで雑誌など読んでいる間を通り、座席に滑り込む。そういう客は大抵のフライトで居るが、何ということだ、自分がそうなるとは思わなかった。もっともそれで出発時刻が遅れたわけではないし、それに機体整備か何かの都合で予定時刻が来ても発たなかったから実害はなかった。遅刻しそうになったのは、20年以上前カナダのウィニペグ空港へ向かう途中で車の調子が悪くなり乗り遅れそうになって以来だ。あのときは地上アテンダントのお姉さんに「走って！」と言われた。

今回慌てることになった理由は、ゲート番号を間違えた以外に、時差があることを忘れていたこと。ウィーンとヘルシンキとでは1時間の時差があり、ヘルシンキでは針を1時間進めておくべきだった。いやに時間があるなど感じていたのはそのせい。

さて、何事もなかったかのように、実際不都合な

ことは何も起こらなかったのだが、ヘルシンキ1715発AY073便は薄曇りのヘルシンキ空港を成田へ向かい離陸した。現地1715は日本時間2315。まだ「今日」だ。

6月16日（日）

僕の席は2人席の通路側で、窓際にはおそらく40歳代のおそらく大学教授が座っていた。行きは隣のお年寄りと言もしゃべらず来たが、今度は話しかけてみた。フィンランドでの研究発表会の帰りだという。

酒には詳しいらしく、これおいしいですよと言われて、どうせ味などわからないくせに、機内でGustav Cloudberry Liqueur 17.00€を購入。アルコール21%、とても甘いらしくアイスクリームにかけて食べるとおいしいとアテンダントが言っていた。もっとも帰宅してから1ヶ月、まだ試していない。琥珀色の液体の円錐形の瓶が戸棚に飾ってある。

年配ながら元気なハスキーな声の女性アテンダントがこちらの通路の担当だったが、機内サービスのとき勢い余ってワゴンをどこかにぶつけ、その拍子に高級そうなコニャックの瓶が落ちこちた。蓋が外れて中の液体がトクトクと音を立てて床にしみ込んで行く。しばらくいい香りが漂っていた。

復路も映画を観ることもなく、読書と睡眠に費やす。成田到着何時間か前に出たたっぷり朝食が



右の写真。行きも同じだったが、今回は食べきれなかった。周りを見ても大抵残っていた。いい加減高カロリー食事をしてくて、これがとどめだ。

それから、機内のメニューで気が付いたのだが、フィンランドとスウェーデンは隣同士の国なのに、フィンランド語とスウェーデン語はつづりが全く違う。何故だろうと思って少し調べてみたが、やはり語源が異なるよう。

フィンランド語はウラル語族という族に属し、シベリア（北アジア）中北部、北ヨーロッパ、東ヨーロッパに分布する語族である。一方、スウェーデン語は、「インド・ヨーロッパ語族ゲルマン語派北ゲルマン語群」のひとつらしい。インド・ヨーロッパ語ということはつまり英語とかと同じわけね。デンマーク語やノルウェー語はスウェーデン語と同じ族で、この3語の言語は、違いはあるものの非常に近く、他の言語をことさら学習していなくてもある程度理解できるのだと。



フィンランドは長らくスウェーデンに支配されていた。それでフィンランドではスウェーデン語も国語としてフィンランド語と併用されていて、公的

表記はほとんど両語併記される。しかし、スウェーデン語人口は6%以下と少ない。

Tomaattikastikkeessa のように単語が長くて、同じ文字が続くつづりはフィンランド語、tomatsås のように母音の上に○が付くのが多いのがスウェーデン語だね。

出張中は天候に恵まれたが、着陸した成田空港は小雨&やたら蒸し暑かった。

今回の出張も、事故にも遭わず盗難にも遭わず無事帰還。

ところで、機内食から失敬した塩・胡椒セットだが、湿度の高い日本ではあっという間に湿気る。上の写真は使用后。なかなか面白い上げ底だ。機内では一食一食についてくるのだからたくさんは要らないものね。

(了)